公開講演会記録

日中交流の過去及び現状と展望

井出亜夫（会員）

はじめに

２０２４年は、１９７２年日中国交正常化以来52年、平和友好条約締結以来46年が経過します。この間、人の往来、経済交流などの分野において大いなる進展があります。一方、国際関係においては、米国一極体制から、米中二強体制への進行が徐々に進んでいます。これに対し、米国主導による対中デカップリング政策の展開が試みられています。しかし、こうした米国も大統領他主要閣僚による中国側カウンターパートとの直接対話をかなりの頻度で続けている事実も直視しなければなりません。

改革開放による市場経済化の進展と習近平一党支配による中国の政治体制、世界第二の経済大国となった中国との連携をいかに進めていくか、長い対中関係の歴史を有するとともに、対華21か条の要求、満州事変、日中戦争と戦前の過ちを犯したわが国の歴史的レーゾン・デートルが問われています。

時の眼で見、鳥の眼で見る政策展開ができるか考えてみたいものです。

日本と中国――その交流の歴史

ここでは、少し視野を広げ両国の歴史的交流をたどり、両国関係の将来展望を論じてみたいと思います。

中国の正史に現れる日本は、西暦３世紀、倭国の情勢と邪馬台国女王卑弥呼の存在を記録した「魏志倭人伝」を嚆矢とし、また、『古事記』（７１２年）には、応神天皇（史実に疑義はあるが）の時代、百済から王仁（ワニ）が渡来して『論語』と『千字文』を献上したことが記載されています。

漢字の伝来は、万葉仮名からひらがなへの発展、日本文化への派生を生みますが、大陸との往来は、遣隋使派遣６００年から６１８年、遣唐使６３０年から８９４年まで、古代において３世紀に及びました。遣唐使派遣における大使以下首脳グループ以外の留学生・留学僧は、今日、日本で実施中の「外国人技能実習生」の「古代日中版」とも言えましょう。

その後、平安以降日本文化の創造、発展も一方にはありますが、喫茶の伝来、禅僧の往来、宋銭の通貨としての使用、寧波を中心とする日明貿易など日中の交流は時を絶ちません。

礪波護（となみまもる）京都大学名誉教授は「日本にとって中国とは何か」の中で、

①「朝貢と畏敬の国―邪馬台国と倭国」、
②「憧憬と模範の国―飛鳥と平安」、
③「先進と親愛の国―鎌倉から江戸」、
④「対等と侮蔑の国―明治～昭和前期」、
⑤「親愛と嫌悪ないまぜの国―昭和中期以後」と日本人の中国感の変転を紹介しています。

「憧憬と模範の国」では、飛鳥、平安における交流において、「小野妹子」が聖徳太子の意「日出づる処の天子書を日没する処の天子に致す　恙無きや」を受け、遣隋使として訪中します。また、遣唐使阿倍仲麻呂は長年唐に滞在、唐の高官となった後、「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」と望郷の念から帰国に向かいます。仲麻呂が帰国途上、遭難死したと思った李白は、「晁卿衡（仲麻呂の中国名）を哭す」と題する五言絶句を作り、両者の友情、日中関係を偲ぶことができます。

「先進と親愛の国」では、宋代景徳鎮に代表される陶磁器が、日本に伝来し、中国伝来のものに最も近いものを造ることができる陶工が日本の名工と言われました。また、北宋の首都開封の市街を描いた「清明上河図」には、運送屋、両替商、食堂などが描かれ、日本の中国史家は、宋代において中国では近世が実現していたと評しましたが、その影響ははるか下って、「洛中洛外図」として描かれています。

朱子学は、徳川幕府公認の学として導入されましたが、荻生徂徠は、これを批判し、儒教の原点、孔子、孟子に戻ることを主張し、また、伝来した陽明学を学んだ大塩平八郎は、王陽明の「知行合一」思想を実践し、貧民救済の乱を起こしました。

「対等と侮蔑の国―明治～昭和前期」では、明治維新による日本近代化の影響の下、多くの中国人が自国の近代化を求めて来日しますが、日露戦争後の日本は、朝河貫一博士（イェール大学教授）が『日本之禍機』（１９０９年）で警告する意味を理解せず、世界史の軌道を外してしまったと指摘しています。対華21か条の要求（１９１５年）の後、孫文は「日本は欧米帝国主義の走狗となるのか、アジアの王道を開く先駆者となるのか」と述べ日本を去りましたが、わが国は満州事変、日中戦争への道を歩んでしまいました。

松尾芭蕉「奥の細道」では、「松島は扶桑（日本）第一の名所にして、遠く洞庭、西湖に恥じず」と、伝えられる中国の名所に敬意を表しつつ描写し

ていますが、「箱根の山は天下の険　函谷関も物ならず（中略）蜀の桟道数ならず」と詠う歌詞は明治の驕りの表れともいえましょう。

そうした中でも、仙台医学専門学校に留学した魯迅を見守る藤野厳九郎先生や魯迅文学の出版を支援した内山書店内山完造、孫文の独立運動をサポートした宮崎滔天、梅屋庄吉、犬養毅など多くの日本人の存在は、近代日中交流の歴史に一抹の光を放っています。

東洋思想と永続企業

過日、日本を訪れた中国からの企業研修グループは、なぜ日本には、２００年、３００年と歴史を有する企業が数千社も存在するのかと私に問い、私は、江戸時代３００年に及ぶ平和の存在とビジネスにおける『論語と算盤』（殖産興業家渋沢栄一著）を紹介し、義と利のバランスを図る東洋思想のゆえんにあることを説きました。

儒教、老荘思想あるいは仏教思想の中に、永続企業存続の秘訣があるだろうと推察します。特に経済のグローバル化の進展の下、地球環境問題や、拡大する格差社会にどう取組むか、「21世紀の市場経済システムは永続できるか」という問題（世界的ベストセラーとなったトマ・ピケティの書）に私たちは直面しています。『論語』『孟子』『菜根譚』など儒仏道の東洋思想には、その解を説く要素が多数存在することを改めて痛感する次第です。

世界における日中の役割・責任

第二の経済大国として発展を続ける習近平政権は、アヘン戦争以来の中国近代史の苦悩を振り返り、中華民族の再興を訴え、国民全体がほどほど豊かになる国（小康社会達成）、先進近代工業の建設、三農問題（農村、農民、農業）、環境問題の解決を進める一方、昔日のシルクロードの現代版ともいうべき「一帯一路政策」を展開しています。こうした課題で着実に実績を上げることができるか否かが、今後の政権評価につながりましょう。

また、かつて物まね大国と言われた中国が、今や特許大国・知財大国として世界に躍り出ている現実も直視しなければなりませんし、最近、中国政府が発信する人類共同社会の建設もその真意を問わなければいけません。

こうした中国の近現代化のプロセスの中で、わが国としては、①日中関係の長い交流の歴史を想起し、②わが国近代化の成功と失敗の歴史を評価、反省しつつ、また、③今日の市場経済の欠陥を克服する共通の東洋思想で意見交換しつつ、④日中関係の将来を展望していくことが求められます。そして、それが、日中両国の共存共栄につながり、また、世界史における両国の責任と役割を果たすことにも通じましょう。

おわりにあたって

以下の東洋思想を紹介しましょう。

①前漢・劉向
『説苑』

楚の共王出猟して、その弓を遺ふ。左右これを求めんことを請ふ。共王曰く、「止めよ。楚人弓を遺ふも、楚人これを得ん。又なんぞ求めん」と。仲尼（注：孔子）これを聞きて曰く、「惜しいかな、その大ならざる。また人弓を遺ふも人これを得んと曰はんのみ。何ぞ必ずしも楚のみならんや」と。仲尼は所謂大公なり（国家の概念を超える発想）。

（原文）楚共王出猟、而遺其弓。左右請求之。共王曰、止。楚人遺弓、楚人得之。又何求焉。仲尼聞之曰、惜乎、其不大。亦曰人遺弓人得之而已。何必楚也。仲尼所謂大公也。

②「先憂後楽」。北宋・范仲淹（９８９～１０５２）
『岳陽楼記』の末尾一節
天下の憂いに先んじて憂え、天下の楽しみの後に楽しむ（指導者の心得を記したもの）。

（原文）先天下之憂而憂、後天下之楽而楽歟。

③マハトマ・ガンジー（インド独立指導者）
「現代社会７つの大罪」
・原則なき政治
・道徳なき商業
・労働なき富
・人格なき学識（教育）
・人間性なき科学
・良心なき快楽
・献身なき信仰

④宮沢賢治（１８９６～１９３３。作家、農民指導者。日蓮宗の影響を受ける）
「農民芸術概論綱要」
われらはいっしょにこれから何を論ずるか（中略）
世界がぜんたい幸福にならないうちは
個人の幸福はあり得ない
自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する
この方向は古い聖者の踏みまた教へた道ではないか
新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある（中略）
我らは世界のまことの幸福を索ねよう（後略）

（注：本稿は、『ＪＣ　ＥＣＯＮＯＭＩＣ　ＪＯＵＲＮＡＬ』（日中経済協会機関誌）２０２０年３月号に「ＦＯＣＵＳ―日中交流の過去及び現在と展望」と題して掲載したものに加筆、さらに、２０２４年４月４日国際善隣協会講演会の内容を加筆したものです。）
（２０２４年４月４日・公開講演会）